

「今日の説教、聴き手のために」 2008/5/25 明治学院教会(115)

(このプリントは毎週作っているものです)

岩井健作

「献身と礼拝」

ローマの信徒への手紙12章1-2節

- 1、教会の「礼拝式」には①「神から人へ」②「人から神へ」③「交わり、共同性」(マタイ18:20)の要素がある。
- 2、ローマ12:1の「礼拝」は③の要素を示す。冒頭の「こういうわけで」は1章-11章までの全体を受ける。端的に「福音」「神の義」「無償の義」(義は神からの関係)の再度の強調である。「神の憐れみによって」がそれを示す。その上で「勧め」を語る。「勧め(パラカレオーは慰めの意あり)」は実践的な指示。方法論の明示は「勧め」。
- 3、「自分の体を神の喜ばれる聖なる生けるいけにえとして捧げなさい。」
「いけにえ(犠牲)」がイスラエル宗教の祭儀として持っていた意味がここでは精神化、象徴化される。「からだ」の語には二義あり。①ローマ6章の、洗礼を受けることにより「古い自分がキリストと共に十字架につけられ・・・罪に支配された体が滅ぼされ・・・」神との関係の鮮明化。②交わり、共同性、被造物のつながりの中での存在。「自分の体を献げる」とは、神の恵み下、あらゆる被造物とのつながりで生かされている事実を、自覚的に捉え直して生きること。「献身」は「献身的な奉仕」のごとく、他者を生かす働き。イエスの生に従う生き方。「礼拝(ラトレイア)」は「キリスト者の生全体」「からだの実存を捧げることが根本的に礼拝の基礎をなす」(釈義家ケーゼマン)。「なすべき(ロギコス)礼拝」の「ロギコス」は理性的という意味。「祭儀的」にではなく、身体性を伴った日常生活の領域での意味。イエスに倣って、人の尻拭いをする生き方、僕として仕える生き方、他の人の足を洗う生き方が「礼拝」そのものである。
- 4、ある結婚披露でのスピーチ。夫婦の四段階は「熱愛、葛藤、達観、感謝」だという。その過程には双方の「献身」がある。献身的な身のこなしが、感謝にいたる共同性を成り立たせる。この関係は、教会の共同性、友人との共同性、運動体における共同性において然り。「あなたがらのなすべき礼拝(奉仕)」はその過程を暗示している。
- 5、祈り。何故、この苦労が、私にとの思いがあります。しかし、そのことがあなたの御業につながっていると信じ、生きられます様に。日常が「なすべき礼拝」であります様に。主イエスの名によって。